

私の読書日記

間との共生関係にある微生物の群系、研究の第一人者である著者はマー・シャヤル&ウオレンのピロリ菌に関する発表を聞き、ハワイの日系

例年、九月はなにかと忙しいので、フランス行きはなしということになつていいのだが、今年はサバティカルということで気が大きくなつたのか、宿と飛行機を早めに予約したのが大間違い。出発前に書き上げられない連載が続出してしまい、大量の資料を抱えたまま出発とあつた。

機中で読み始めたのが、前川久美子『中世パリの装飾写本―書物と読者』(工作舎 3800円+税)。パリのBN(国立図書館)などに所蔵されている装飾写本のなかから十二の傑作を選び、これに詳細な解説をくわえると同時に装飾写本という物質的枠組みが生み出した独特的芸術性を考察

るようだ。入門書にして決定版という稀有な一冊である。

×月×日

連載のほかに九月は文学賞・学芸賞のシーズンなどで読むべき本もたくさんあります。パリにいながら宿から一步も出さずして読書に集中したり、キーボードを打ちまくるというなんともミゼラブルな日々になつてしまつた。九月のパリはまだ秋シーズンがスタートしているので、展覧会も映画も芝居もないのが、不幸中の幸いか?

しかし、そんな中で読んだマーティン・J・ブレイザー『失われてゆく、我々の内なる細菌』(山本太郎訳 みすず書房 3200円+税)はパラダイムの大転換を我々に強いる本年屈指の重要作である。

マイクロバイオーム(人間との共生関係にある微生物の群系)研究の第一人者である著者はマー・シャヤル&ウオレンのピロリ菌に関する発表を聞き、ハワイの日系

しもの。

「それ(写本装飾)は書物のなかにあらわれる芸術としての独自性をもつていて。まずは、文字と共に存しないなければならない。視覚的に美しいハーモニーをつくったと絵画のコラボレーションにその芸術性の神髄があるのだが、これが意外に理解されないからだ。いかえると、装飾写本の絵画部分(ミニアチュール)だけ抜きだしてこれを芸術的なのは歴史的観点から論じるのは邪道であり、装飾写本の正しい味わい方ではない。装飾写本はあくまで①ミニアチュール、②テクスト、③テクストの頭文字and/orそれを絵画化した絵文字、④バ・ド・ペジュ(テクスト下の補足的絵画)、⑤余白装飾and/or枠組のセットを一単位として鑑賞すべき芸術なのだ。こ

書物のなかにあるという条件は、あまりにも当たり前のと思われるかもしれない。しかし、写本を装飾した中世の画家たちは、それを最大限活用して独自の美術を生みだしている」

装飾写本の正しい味わい方ではない。装飾写本はあくまで①ミニアチュール、②テクスト、③テクストの頭文字and/orそれを絵画化した絵文字、④バ・ド・ペジュ(テクスト下の補足的絵画)、⑤余白装飾and/or枠組のセットを一単位として鑑賞すべき芸術なのだ。こ

のセットは十三世紀前半の「教訓聖書」には一ページに八単位あるが、中世も後半になると一ページ一単位も進化し、⑤余白装飾and/or枠組が異常増殖し、薦の蔓だけだったのが紋章やエンブレムとなり、ついにはこの部分も絵画となつて、ミニアチュールとテクストを圧倒するに至る。

すさまじいばかりの装飾の情熱である。とくに十五世紀に入って王侯貴族によつて、ミニアチュールとテクストを圧倒するに至る。だが、十五世紀半ばにグランペルクの活字印刷術が発明されると、この装飾写本の頂点「ベリー公の『いとも豪華なる時祷書』」にいたるべージによってはテクストさえ駆逐して絵画作品として自立する。絵画自身も遠近法を取り入れて写実的なになる。

だが、十五世紀半ばにグランペルクの活字印刷術が発明されると、この装飾写本の頂点「ベリー公の『いとも豪華なる時祷書』」にいたるべージによってはテクストさえ駆逐して絵画作品として自立する。絵画自身も遠近法を取り入れて写実的なになる。

鹿島 茂
フランス文学者



『中世パリの装飾写本』

のセットは十三世紀前半の「教訓聖書」には一ページに八単位あるが、中世も後半になると一ページ一単位も進化し、⑤余白装飾and/or枠組が異常増殖し、薦の蔓だけだったのが紋章やエンブレムとなり、ついにはこの部分も絵画となつて、ミニアチュールとテクストを圧倒するに至る。

すさまじいばかりの装飾の情熱である。とくに十五世紀に入って王侯貴族によつて、ミニアチュールとテクストを圧倒するに至る。だが、十五世紀半ばにグランペルクの活字印刷術が発明されると、この装飾写本の頂点「ベリー公の『いとも豪華なる時祷書』」にいたるべージによってはテクストさえ駆逐して絵画作品として自立する。絵画自身も遠近法を取り入れて写実的なになる。

だが、十五世紀半ばにグランペルクの活字印刷術が発明されると、この装飾写本の頂点「ベリー公の『いとも豪華なる時祷書』」にいたるべージによってはテクストさえ駆逐して絵画作品として自立する。絵画自身も遠近法を取り入れて写実的なになる。

た、帝王切開は乳児が細菌叢である産道を通過しないために、母から子へのマイクロバイオームの継承を不可能にする。一方、抗生素登場以後に増加したあらゆる疾患、すなわち、喘息、自己免疫型糖尿病、食物アレルギー、花粉症、肥満、自閉症、うつ病などはアンフィバイオースの関係にあるのではないかと疑つて調べたところ、ピロリ菌を持たない患者は保菌者に比べて胃食道逆流症を発症する確率が二倍であることなどが判明。「私たちは、病原菌として発見されたピロリ菌が両刃の剣である」とれば、ピロリ菌は胃がんや胃潰瘍のリスクを上昇させているのか、また消えようとしているのか」

高校の副読本に指定すべき緊急かつ重大な警告の書である。

×月×日

パリでこもりきりで読書に執筆ならまだ許せるが、宿泊先がファックスなしの短期貸しアパートマンであるため、手動変換機能つきのPDA内蔵パソコンを持参したら、これがとんでもなくせもので、書いたテクス

せる。一方で、それは胃食道逆流症を抑制し、結果として食道がんの発症を予防する。(中略)一方、食道腺がんの割合は上昇する。古典的な意味でのアンフィバイオースである」

ここから著者は抗生素によつて駆逐された感染症と抗生剤登場以後に増加したあらゆる疾患、すなわち、喘息、自己免疫型糖尿病、食物アレルギー、花粉症、肥満、自閉症、うつ病などはアンフィバイオースの関係にあるのではないかと仮説を立てる。

「ピロリ菌研究が私の考え方(すなわち私たちが祖先からひき継いだ多くの細菌の消失を心配するという考え方)をかたちづくった。どれほど多くの微生物が消えてしまつたのか、また消えようとしているのか」

かくて、著者は抗生素の過剰摂取の原因となりうる事象を列挙していく。医師による風邪ひき児童への過剰投与、帝王切開における母親への予防的投与、さらには、家畜を太らせるための低用量投与など。ま

D/Fは開きにくいくらいに手動変換も低レベル。それでも締め切りは守らなくてはならないのである。パリのトラブルここに極まり。というわけで、最後の紹介は短くならざるをえないが日仏の影響関係からみると意外に重要な一冊。

日本の少女漫画はやおいとかBL(ボーイズラブ)といった不思議なジャンルを確立させたが、ラシルド、森茉莉ほか『古典BL小説集』(笠間千浪編 平凡社ライブラリー 1300円+税)はこのジャンルが世纪末の英米仏にはすでにあり、隠れた水脈をかたちづくっていたことを教えてくれる好アンソロジー。特に、ラシルド「自然を逸する者たち」は兄弟間の同性愛というBLの定番を扱っている点で、注目に値いする。森茉莉は夫の山田珠樹を追つて渡仏した際にラシルドのBL本と出会い、アーディアを得たのかもしない。そんな想像をしたくなるパリの秋の夕暮れであ

『私の読書日記』は、鹿島茂、立花隆、池澤夏樹、穂村弘、酒井順子の五氏が毎週交代で執筆いたします。

装飾写本、抗生素の冬、ボーアイズラブ

鹿島 茂
フランス文学者

